

第18号

札幌響くらぶ

発行／札幌響くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

札幌英国公演出発迫る!!

日程ほぼ決定

札幌の創立40周年を記念する英国公演の日程が、ほぼ決まりました。全7回の公演日程につきましては、定演のプログラムなどで既に紹介されていますが、楽員の皆さんなど、一行の具体的な訪英の日程などについてご紹介します。

渡英の一行は、指揮の尾高さん、独奏者の竹澤さん、楽員81名、OBを含むエキストラ15名、事務局4名、ステージスタッフ3名の計105名です。

渡英に先立ち、10月15日から17日まで、芸術の森で最終的な練習が行われます。中2日の休養をはさみ、20日と21日の2日に分かれて日本を出発します。

英国到着後は、ロンドンでの1日ずつの休日と練習日の後、24日のウェールズのスウォンジーでの公演で英国公演の始まりとなります。

当日は朝の9時にロンドンのホテルをバス3台で出発。午後1時スウォンジー到着後に、午後3時半から2時間のゲネプロ、午後7時半本番開始となります。

その後、ほぼ同様な日程で、25日イングランドのクロイドン公演、26日移動日、27日休日、28日北アイルランドのベルファスト公演、29日イングランドのバーミンガム公演、30日ロンドン公演と続きます。31日は移動日で、バスでウェールズのカーディフに移動。翌11月1日には、尾高さんが桂冠指揮者を務めるBBCウェールズ響の本拠地でもあるカーディ

フでの公演が行われます。たぶんカーディフの皆さんは、自分たちのマエストロがどんなオーケストラを連れてくるのかと興味津々でいることと思います。

翌2日には、飛行機でスコットランドのエディンバラに移動。3日土曜日に最後の公演となるエディンバラ公演が午後7時半から行われます。

このエディンバラ公演をもって、公式の札幌の英国公演は終了となり、帰国ということになるはずなのですが、更にもう一つ演奏会が行われます。

前日公演を行ったのと同じUsher Hallでの無料の、青少年のためのエデュケーション・プログラムです。尾高さんの強い希望とプロデュースによるもので、現在、尾高さんがそのプログラムを「熟慮」中とのこと。札幌フルメンバーが出演し、竹澤恭子さんも「是非出演したい」とおっしゃっておられるそうです。

札幌の皆さんは、翌5日にロンドンを発ち、6日に成田経由で札幌に帰る予定です。

かなりの強行日程ですが、楽員の皆さんがそれに乗れ越え、海外での経験を踏んで、更に一步成長してこられることをファンとしては期待したいと思います。

なお、同行ツアーは募集定員に達し、募集を締め切り、申し込みをお断りしているということです。



ソリストに聞く

今回は、目前に迫った札幌英国公演に同行ソリストとして参加される竹澤恭子さんに、9月定期の前々日9日に、札幌パークホテルでお話をうかがいました。

札幌英国公演に同行

大変光栄に思います!!

たけざわ きょうこ

竹澤恭子さん

世界で活躍する
ヴァイオリニスト



竹澤恭子さんのプロフィール

愛知県生まれ。3歳よりヴァイオリンを始め、6歳より才能教育研究会海外派遣団の一員として、アメリカ、カナダ、ヨーロッパへの演奏旅行を行う。桐朋女子高校在学中に第51回日本音楽コンクール第1位、併せてレウカディア賞、黒柳賞を受賞。85年ジュリアード音楽院に入学、ドロシー・ディレイ、川崎雅夫両氏に師事。86年第2回インディアナポリス国際ヴァイオリン・コンクールで圧倒的な優勝を飾り、以後「世界のKYOKO TAKEZAWA」として国際的に活躍している。

これまで、日本の各オーケストラはもちろん、ニューヨーク・フィル、ボストン響、シカゴ響、ロンドン響、モスクワ放送響など、世界中の主要なオーケストラや、指揮者もマズア、メータ、スラトキン、デュトワ、サヴァリッシュ、などの巨匠、小澤征爾、朝比奈隆、尾高忠明、秋山和慶、外山雄三、などの邦人指揮者とも協演している。93年に出光賞、99年に愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞している。CDも多数リリースし、ニューヨークを本拠に世界中で活躍中。1707年製ストラディヴァリウス“ハンマー”を携え、札幌英国ツアーに同行する。

— 竹澤さんは今回札幌英国公演のソリストとして同行されることになっておりますが、札幌との協演はいつ頃からになりますか。

竹澤 札幌とは5～6年前でしたか、尾高先生と厚生年金会館で演奏させていただいたのが最初で、今回は3回目になります。札幌40周年記念の英国公演で協演させていただけることは、大変光栄に思っています。

— 最近では、昨年10月の定期でメンデルスゾーンのコンチェルトを聴かせていただきましたが、繊細で力強い演奏ということで大変好評でした。ダイナミックで豪快な演奏は、お使いのストラディヴァリウスの「ハンマー」がその名の通り力強い演奏に向いているからなのでしょうか。

竹澤 よくそういう風に言われることはありますが、「ハンマー」というのは、この楽器の前の所有者がドイツ人のコレクターでハンマーという名前の人でしたので、そのような愛称で呼ばれているんです。

— 米国、欧州、日本と、バランスよく演奏活動をされているとうかがっていますが、外国ではどのような表現で評価されることが多いのですか。

竹澤 そうですね、日本人の演奏家に対する先入観として「とても正確だが少し機械的」というのがありますが、それとは違うという言われ方や、パッションイト（情熱的）などという評価もしばしば聞きます。

— その評価は竹澤さんにとってHappyなものなのでしょうか。

竹澤 そうですね、日本で勉強していた時には性格的にはまじめで先生がおっしゃったことは100%一生懸命やるというタイプだったのですが、外国の先生にみてもらうようになり、また留学してからは周りの環境も変わり、周りの方の音楽作りがすごく積極的で、なにを表現したいかはっきりしているんですね。それが刺激になって、元々感じてはいたのですが、思い切って自分のものを前に出すっていうんでしょうか、そういうことが日本にいる時には、どういう風にしたらよいのか方法がわからなかったんです。米国に行って色々な角度から考えられるようになり、自分の内面

のものを表現できるようになったと思っています。また、舞台を踏むという経験を積むごとに、それがますます出てきたように思います。ですから、そのような評価は私にとっては嬉しいものなのです。

—— これまで協演された指揮者なりオーケストラで、印象的なことを教えて下さい。

竹澤 そうですね、私のオーケストラとの協演デビューはズビン・メータさん指揮のニューヨーク・フィルで、バルトークのコンチェルトだったのですが、オーケストラの迫力というか、音楽性に直面して、私自身弾きごたえというものをすごく感じ、感動したことを今でも鮮明に覚えております。

たくさんのオーケストラと協演しておりますが、アンドリュウ・デービスさんの指揮でボストン響との協演のときには、オーケストラのバランスの良さというのでしょうか、協奏曲でもソリストを引き立たせる音楽性というものがとても素晴らしく、ソリストが力む必要性が全くない、そんな演奏会で印象に残っております。

マイケル・ティルソン・トーマスさんともサンフランシスコ響で一緒させてもらいましたが、普通外国では同一プログラムで3~4回続けて演奏会をやるのですが、演奏後、毎回意見交換をして下さり、一緒に音楽を作ってゆくんだという姿勢に感動したり、よりよい音楽を求める情熱や真摯さというものを勉強させていただきました。

—— 聴衆の反応といいますか、コンサートでの雰囲気などについて、日本と外国との違いなど感じられることはありますか。

竹澤 外国の友達にいわせると、日本の聴衆は素晴らしい、ものすごく静かでお行儀がよく、拍手もあたたかいと言います。日本の人からは、日本の聴衆は感情とか感動の表現が乏しいのではないかと、というようなことを聞きます。でも、感情の表現は文化の問題ですから、どちらが良いというものではないと思います。

確かに、スタンディング・オベーションやブラボーの連呼などは興奮するものには違いないのですが、演奏しているものにとっては、聴衆の反応は肌で感じますので、特にブラボーというかけ声がなくとも、感動を共有していただいているかどうかはよくわかります。演奏中でも、ホールの空気の中から、お聴きいただいている皆さんからのエネルギーを頂

戴しながら、より良い演奏が可能になってゆくように思っています。

—— 札幌と協演されて、札幌の印象をお聞かせいただけますか。

竹澤 何回も聴いているわけではないので、昨年協演させていただいたときの感想としては、コンサートホールに会場が移り、音の響きに艶が出て、アンサンブルも洗練され、充実しているように思いました。

明日、今回の英国公演のプログラムでもあるシベリウスのコンチェルトのリハーサルがありますが、演奏旅行を控えて気持ちが高揚していると思いますので、また違った音が聴けるのではないかと楽しみにしております。



—— 英国公演への抱負などをお聞かせいただきたいのですが。

竹澤 尾高先生とは、読響とともにヨーロッパ演奏旅行をしたことがあり、何の心配もありませんので、札幌との協演を楽しみにしております。特に、シベリウスのコンチェルトは、私の好きな曲ですし、コンサートが盛り上がるよう努力したいと思います。

—— 札幌くらぶの何人かも聴きにまいりますので、良い演奏を期待しております。ありがとうございました。

竹澤さんは、密度の高いダイナミックな演奏にみる、稀な才能の持ち主であることを感じさせない、気さくなお人柄。写真撮影で同席した石川政治さん共々、好印象を受けた。別れ際、大ヴァイオリニストの鍛え上げられた左手指をしっかりと触らせていただいた。役得というべきか。

(インタビューア— 上田文雄)

FAN CLUBの和

山響ファンクラブ

今号では、山形交響楽団のファンクラブをご紹介します。発足間もないようですが、活発な活動を展開されているようです。

山響ファンクラブは、昨年4月に発会したばかりの、まだまだ駆け出しのファンクラブです。オーケストラ自体は30年もの長い歴史があるので、親子二世に渡って山響の音楽教室に接して、クラシック音楽に親しみを持ったという家庭も、山形では少なくありません。それほど地域に根ざしたオーケストラでありながら、今まで、ファンクラブという、目に見える形での応援態勢がなかったのは不思議なくらいでした。でも、山形県民は控えめというか、感情表現があまり得手でないところがありますので、無理もなかったかもしれません。

私は、本業は音楽と何の関係もない人間ですが、オペラやオーケストラを聴くのが大好きで、好きな指揮者やオケの公演を聴くためなら、どこへでも出かけていくタイプの人間です。ですから、山響の事務局から、ファンクラブ設立の依頼を受けた時は、喜んで引き受けたのでした。

東北地方では、決して地域住民の音楽文化への理解度や親密度は高いとは言えません。野球やサッカーなどのスポーツチームに比べ、世間一般の関心はあまり高くないと思いますが、人口が25万にも満たない地方都市で、30年もの歴史があるオーケストラを抱えているというのは、全国にも誇れることだと断言できるでしょう。

しかし、地元の人間にとっては、その存在があまりにも当たり前すぎて、言わば空気みたいなものであり、自分達が物心ともにオーケストラを支えていることが、いかに価値のある素晴らしいことか、かえってわかりにくいのも事実です。そこで、私が昨年始めにファンクラブの設立発起人代表となり、山形県全域に広く入会を呼びかけたことは、「灯台下暗し」だった山形県民に、改めて山形交響楽団を身近

に持っていることの素晴らしさ、誇りを再認識させる絶好の機会となりました。当初から150人もの会員を有して、大々的に設立総会を開くことができたのも、いままでの漠然とした山響への想いが、堰を切ったように大きな流れとなって、勢いよく押し寄せたことに他なりません。

2000年度の山響は、これに答えるように、続々と意欲的な定期演奏会の演目を用意し、毎回エキサイティングな演奏を展開し、まさにステージと聴衆が一体となった名演が繰り広げられたのでした。

今年度に入っても、定演の客数は右肩上りに増え続けておりますが、特筆すべきは、この4月にJR山形駅西口にオープンした「山形テルサ」のこけら落としでのマルシア・デ・ラローチャとの協演です。指揮は黒岩英臣氏で、曲はファリャの「スペインの庭の夜」とモーツァルト「ピアノ協奏曲21番」。これほど偉大な演奏家と協演するのは、山響の長い歴史の中でも初めてのことでしたが、山響はまるで別のオーケストラに生まれ変わったかのような、瑞々しく美しい演奏で満席の聴衆の期待に応えました。山響が、また一つ階段を上ったような、そして山形の文化史にも画期的なことになったのは、ラローチャ女史の強烈な存在と黒岩さんの絶妙の誘導があったわけですが、永田音響が手がけた素晴らしい音響のホールの中で、オーケストラと地域の人々の呼吸が一つに溶け合ったことが一番の要因だったことは言うまでもありません。

これからも、独特のユニークな演目で快進撃を続ける山形交響楽団。ファンクラブとしては、大先輩にあたる「札響くらぶ」の皆様にもぜひ一度お聴きいただければ幸いに存じます。

(山響ファンクラブ 芳賀光弘)

山形交響楽団

現創立名誉指揮者村川千秋氏の呼びかけにより1972年に東北初のプロオーケストラとして発足。74年社団法人認可。東北6県、新潟県に活動範囲を拡大。山形県芸術文化会議賞、斎藤茂吉文化賞、河北文化賞を受賞し、東北の音楽文化を代表するオケの地位を確立。87年からはサントリーホールなどで計7回の東京公演を成功させ、91年には米コロラド州へ初の海外公演を行った。今年6月にはサントリー地域文化賞を受賞。常任指揮者黒岩英臣氏のもと、年間約170回の演奏活動を展開。

山響ファンクラブ

東北初のプロオケ山響のサポートと音楽文化の振興を目的に2000年設立。会員数100名。主な活動は、会報の発行(年3回)、定演ゲネプロ見学会、楽員との合同芋煮会、ティータイムコンサートのサポート、楽員合同の忘年会など。当面の活動の重点として、市民・県民を対象に山響演奏会の案内、「山形テルサ」の情報提供を行っている他、今年9月に常任指揮者に就任した黒岩英臣氏とファンの橋渡し活動や、山響設立30周年記念事業への支援活動を行っている。

札幌物語 XVIII

海外公演 ①



札幌は創立40周年を記念して間もなくイギリス公演に出かけます。札幌の初の海外公演は、1975年6月に行われました。札幌市の姉妹都市巡りも目的にした公演旅行でした。

6月5日に旧千歳空港から日本航空のチャーター便で直接飛び立ち、アラスカのアンカレッジ空港経由でアメリカのオレゴン州ポートランド空港へ飛び、翌日は休養と市内観光の日、その翌日が演奏会とレセプションでした。8日にはポートランド空港からアイルランドのシャノン空港経由でミュンヘン空港まで行き、ミュンヘン公演とガルミッシュ＝パルテンキルヘン公演を行って14日に帰国しました。

一行は、故板垣市長を筆頭に30人の特別使節団と、指揮者ペーター・シュバルツと85人の札幌交響楽団員、5人の事務局員と貨物担当と乗客担当のJTBからの各添乗員でした。

「千歳空港を国際空港に」は関係者の長年の悲願でしたが、72年の札幌冬季オリンピックに参加する選手・役員が海外から直接乗り入れた以外には、外国との直行便の実績が有りませんでした。当時の札幌理事長伊藤義郎氏などの努力で、札幌は千歳空港から直接アメリカに飛び立つことができました。

途中、アンカレッジ空港では検疫があり、全員が係官の前で、パスポートと一緒に予防注射証明書（通称：イエローペーパー）を見せて健康チェックを受けながら空港ロビーへ退出、そこで3時間ほど待たされました。日本人がアメリカへ入るときのチェックは終戦直後より少しゆるくなったと言われてもまだまだ厳しい時代でしたが、全員が臆することなく悠然と係官の前を通過するのを目にして、さすがに楽隊魂だなと緊張していた添乗員氏が感心し、ほっと胸を撫で下ろしていました。

ポートランド空港に着陸する時目にした景色は、千歳空港に向かって降りているかと錯覚を覚えるほど北海道に似ていました。

ポートランド空港では入国手続きも簡単で、税関はほとんどフリーパスでした。空港からホテルまで、使節団は地元関係者の12台の乗用車に分乗、その他は3台の大型バスに乗り、沿道

の市民が手を振る中を、長い長いパレードになりました。

パレードの先頭には8台の白バイが二列に並んで走り、四辻に差し掛かる度に先頭の2台が左右の道路をふさぎ、一行は全く信号で止まることなく宿舎のヒルトンホテルへ入りました。

札幌が誕生する直前に姉妹都市になったポートランドは「ローズ・フェスティバル」で有名な街です。札幌は、フェスティバルにも合わせて招待されたのです。

市内観光では、世界に有名な「ばら公園」も見ました。大きな起伏に富んだ素晴らしい公園で、一部は札幌市が贈った日本庭園になっていました。

演奏会はマジソンハイスクールの講堂で行われました。大きなキャンパスを持った、のびのびとした造りの学校でした。

会場の講堂へステージ練習の一足先に到着してみると、ステージの中央にアップライト・ピアノが1台のっていました。邪魔なので、札幌の楽器を運んで来た運送屋と一緒に端へずらそうとしました。すると「さわらないで、ピアノ調律師ユニオンの営業妨害になります」と警告され、調律師が到着するまで1時間も待たされました。初めてふれるアメリカのユニオンの実態でした。

演奏会は午後7時に始まり、プログラムはワーグナー作曲歌劇「さまよえるオランダ人」、外山雄三作曲バイオリン協奏曲（独奏：コンサートマスター佐々木一樹）、ベートーベン作曲交響曲第3番「英雄」でした。定員1800人の講堂は聴衆であふれ、姉妹都市のオーケストラの演奏を熱烈なスタンディング・オベーションで讃えてくれました。

アンコールも終わって、興奮冷めやらぬ聴衆に続いて講堂の外に出てみて驚きました。時刻は午後9時を過ぎているのに昼の明るさで、一同歓声を上げました。小鳥も芝生の上で虫をついばんでいました。アメリカは夏時間だったのです。それにしても、緯度が3度高くなると夏の日がこんなに長くなるものかと実感したのです。（竹津宜男）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 トランペット奏者

かねこ よしと
金子 義人 さん

トランペットを始めたきっかけは

祖父も父も琵琶を演奏しておりまして、子どもの頃から音には親しんでおりました。5歳頃からは当時の蓄音機で音楽を聴いておりました。

中学生になって、卓球部に入ろうと、練習に参加していたのですが、隣でブラスバンドの練習の音がして、何気なく覗いてみると、高校付属の中学校でしたので、高校生の先輩から「ちょっと吹いてごらん」とトランペットを渡され、吹くと色々な音が出て、ブラスバンドに引張られ、それがきっかけでブラスバンドに入り、トランペットを始めるようになりました。

ずっとトランペットを続けたのは

高校の時に札幌にシャルル・ミンシュ率いるボストン交響楽団が来まして、チケットが手に入らなかった私は、楽器ケースを持って市民会館の楽屋口の所でうろうろしておりました。その時、マネージャーのような方に手招きされ、ついて行くと、舞台の袖で聴かせてくれました。その演奏に感動して、自分もオーケストラのプレイヤーになりたい、と思いました。翌日、ボストンの楽員と楽器に親しんでいる市民との交流会があり、私も後に首席になったアルモンド・ギタルラ氏の指導を受け、その時から氏は私の生涯の先生となりました。

札幌入団のいきさつは

高校1年から札幌音楽院のオーケストラで吹いていました。大学1年の時に札幌が出来まして、第1回の定演から準団員として吹いていました。4年後に大学を卒業し、改めてオーディションを受け、入団した次第です。

思い出に残る演奏は

小澤征爾さんの「幻想交響曲」。小澤さんが油のりかかった頃、札幌が伸び盛り、聴衆ものっていて、感動的なコンサートでした。



残念ながら亡くなりましたが、チェコ・フィルのコシュラーさんの「新世界」も忘れられません。まさにカリスマ的な指揮者で、ちょっとしたサインを出すだけでオケの音がぴたっと決まるという感じでした。

もう一つ、100回記念での、札幌の古典・ロマン派の響きの土台を築いたペーター・シュバルツさんのブルックナーの7番もすごかったですね。

音楽以外に何か趣味はお持ちですか

私の場合、音楽が仕事でもあり趣味でもあるのだろうと思います。最近は、音楽、音楽という風にならないように心がけています。演奏する時の新鮮味がなくなりますから。

音楽以外では、健康維持をかねて散歩することくらいですね。

トランペットの魅力はどんなところ

やはり、自分の息を使って演奏しますから、奏者の気持ちがストレートに出て、意志が伝わりやすいというところでしょうか。それは反面で恐ろしいことでもあるのですが。単純な楽器のように見えますが、奥深いものがありまして、この年になって、楽器を吹くことがだんだん面白くなってきました。若い頃の練習が苦しかったことを思い出します。

これからの札幌への希望や期待は

超一流といわれるようなすごい指揮者を呼んでほしいですね。今の札幌はどんな指揮者にも対応でき

るレベルにあると思いますし、それが札幌をぐっと伸ばすような気がします。また、私は来年定年ですが、それは別として、オケは若い感性と老いの経験が調和してこそいい響きになると思います。60歳で辞めてしまうというシステムは、札幌にとっても勿体無いのではないかと考えています。

(インタビュアー 佐藤昇子・佐藤紀子)

札幌交響楽団 打楽器奏者

よしおか みきお
吉岡 幹雄 さん

来年6月定年をお迎えになるそうでおめでとうございます

札幌に入団なさったきっかけは

昭和41年の秋に札幌の演奏会にエキストラでよばれて、初めて札幌に来ました。その時味わったジンギスカンの美味しさ、秋の空、とんぼ、などに新鮮な魅力を感じて帰りました。

翌年、欠員募集のオーディションがありまして入団することになったのです。

僕は富山の出身で、日蓮宗の寺の長男坊。本来なら家を継いで、お経を上げる身になっているところです。小さい頃からバチを持ってドン、ツク、ドンと打つことに馴れていたもので、中学校のプラスバンドで太鼓を受け持ち、だんだんこの道にはまって音大に進んでしまいました。今、実家の寺は弟が継いでいますが、お盆で帰省した折、お経をあげて手伝ったこともありましたよ。

打楽器の魅力はどんなところですか

オーケストラの中では打楽器は縁の下の力もち的な存在ですが、調味料でいえば味をひきしめるスパイスともいえます。それに、楽譜の中身を工夫できるという自由度があるのは打楽器だけですから。

これまで特に印象的だったコンサートについて

昭和49年の小澤征爾が指揮した「幻想交響曲」(第141回定期)での音づくりのとき。札幌はまだ未熟でしたが、小澤の手にかかって、オーケストラの音がみるみる変わってくるのは、驚きでした。

昭和51年の岩城指揮のオール武満プロの時(第166回定期)は楽器集めが大変でした。例えば、お茶の先生から銅鑼を借りたり、薄野にある本願寺の鐘を借りたり、当時、事務局の事業課長だった竹津さん(のち事務局長、現PMFオペレーティング・ディ



レクター)と一緒に走りまわったものです。

尾高さんが正指揮者になってから、大阪のシンフォニーホールの開館記念に招かれたコンサート(昭和57年10月)も忘れられません。本当に素晴らしいホールで、納得のいく演奏ができた。皆、札幌にもこんなホールが欲しい、と強い願望をもって帰ったのです。

今、キタラで演奏できる僕たちは幸せですが、亡くなったヴィオラの奥邦夫さん(昭和57年から7年間ヴィオラ首席奏者、平成7年逝去)などホールができる前に去った先輩たちにもこのホールで演奏してほしかったですね。

ご自身や札幌のこれからについて

定年前にイギリス公演が実現して、良いしめくりになりました。

ファンの皆さんに支えられてこそ札幌です。どうぞ、これからも応援して下さい。

(インタビュアー 鈴木美保・渡辺悦子)



from 「札幌くらぶ」

2001年度札幌くらぶ総会が行われました

既に会員の皆様には総会の報告が郵送されていますが、一応ご報告させていただきます。

2001年度の総会は、6月12日午後6時より札幌コンサートホール2階大会議室で行われました。これまでの総会とは違い、総会后、その場で懇親会を行い、一般の会員の皆様の忌憚のないご意見をうかがおうという趣旨でご案内しました。その結果、52名の参加を得、定刻通り午後6時より開催しました。議事となりました2000年度の事業報告、会計報告は議案書通り承認されました。

また、第4回札幌くらぶコンサートの2002年4月27日実施を含む、2001年度の事業計画、予算につきましても、事務局提案通り承認されました。

総会終了後の懇親会では、札幌40周年記念英国公演の同行ツアー、キタラと札幌の関係のより一層の明確化にどう寄与していくか、などについて活発な意見交換がなされました。また、経済不況の続く現状を憂え、総会で提案されました、演奏会数拡大や入場者数拡大への方法論などにつき、様々な意見交換がなされました。会員の皆様のお知恵を、是非お寄せ下さい。

「札幌創立40周年・英国公演記念演奏会」「記念パーティー・結団式」が行われます

札幌創立40周年記念事業の目玉である英国公演で演奏される曲中、9月の定演でシベリウスのヴァイオリンコンチェルトと交響曲第2番は披露されましたが、それ以外に演奏される武満徹「星・島（スター・アイランド）」、モーツァルト「ピアノ協奏曲20番」、マーラー「交響曲第4番」を演奏し、市民・道民の皆様にご聴いていただく「札幌創立40周年・英国公演記念演奏会」が、10月12日（金）、キタラで行われます。ソリストは違いますが、尾高さんの指揮で、雰囲気は十分に伝わるとおもいます。

当日は、演奏会終了後、賛助いただいた方、関係者などによる記念パーティー・結団式も行われ、英国出発に向けて決意を新たにする予定です。

今年度の練習見学会

例年、11月の定期に合わせて行っていました練習見学会を、英国公演の関係で、10月11日（木）に、翌日の記念コンサートに合わせ、楽員の皆さんと尾高さんのご厚意により、キタラ大ホールで実施することになりました。

会員の皆様には既にご案内が届いていることと思いますが、参加申し込みは9月30日で締め切られております。

今までは、芸術の森での練習を見学させていただきましたが、今回は初めてキタラでの見学会となりました。これを機会に、楽員、指揮者の方々のご理解をいただき、ゲネプロ見学会も実施できれば、などと思っています。

編集後記

前号でお知らせいたしましたように、意外とプロオケのファンクラブは少ないのだなあと思われ知らされました。そんな中で、山響ファンクラブにご登場いただけて、一安心いたしました。以前に連絡をとりましたときに、オーケストラアンサンブル・金沢の事務局が、来年くらいには札幌くらぶを見習ってファンクラブを発足させたいということでしたので、それまでは中断やむなしかなと思っておりまして、名古屋フィルにファンクラブができたのご連絡をいただきました。そのうちにご登場願おうと思っております。

次号の「札幌くらぶ」は、大幅に誌面を変えてさせていただくことになると思います。

同行ツアーに参加された方、独自に「追っかけ」で行かれた方、それらの方たちの「英国公演同行記」を中心にお届けすることになると思います。全誌面がそれで埋められることになるかもしれません。どうかご了承下さい。

なお、前号のよびかけに答え、在京オケのファンクラブをご紹介くださった方が数人いらっしゃいましたが、まずは札幌と同じ地方のプロオケと考えております。在京はその後、と思っています。ご了承下さい。（佐藤良次）